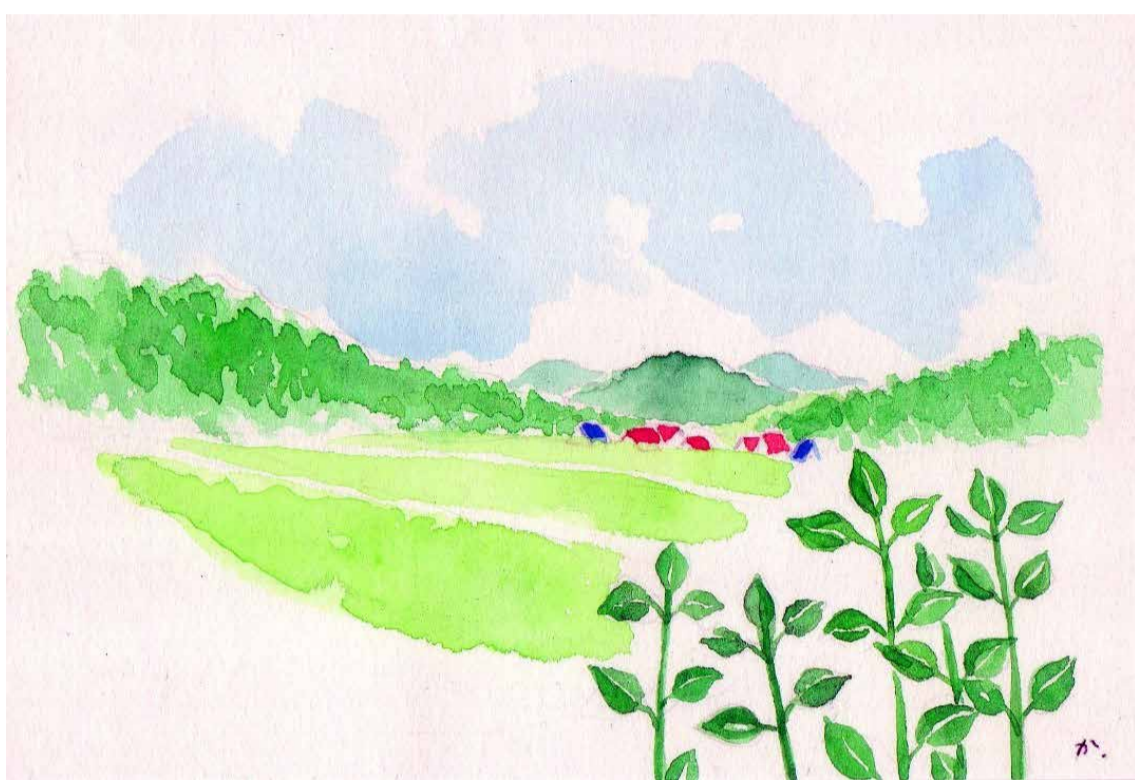


昭和村へ

長いさすらいの実りを
収穫する祝福されたひとよ
大なる遍歴ののちによく
ふるさとへ船を向けた老ユリシーズにも似て
智恵に熟し身丈をのばして
夢見る想いを深く植えるために

(メイ・サートン『夢見つつ深く植えよ』)



この夏、「からむし織の里フェア」が開かれる昭和村を訪ねた。コロナ禍で中止が続き3年ぶりの開催だったが、沿道には幟も案内もない。青々と広がる田んぼと民家のあいだの一本道を延々と進む。初めて来た人なら、会場はどこかと不安になるだろう。昔はのんきすぎるといらだったものだが、変わらない風景に今はほっとする。

1994年の春、私は「からむし織姫1期生」として昭和村を訪れた。過疎、高齢化の進む村が伝統工芸からむし織の担い手を広く募集するという、当時は全国でも例のない企画だった。書類審査、昭和村での面接を経て10名が「織姫」となった。

パソコンもスマホもない時代だ。東京から面接に行くため、村に問い合わせの電話をかけた。浅草から会津田島まで電車で4時間あまり、その先はタクシーで峠を越える。というのはあとで知ったルートで、そのときは新幹線と在来線を乗り継いで、と教えられたかもしれない。「前泊しないと面接に間にあわないですねえ」とのんびり言われ、会場に近い宿を教えてもらった。のちに、当日でも十分間に合ったことを知るのだが、釣り客が主に泊まる小さな宿の、ドアに鍵のない部屋でひと晩を過ごした体験はなかなか得難いものだったと思う。

織姫の募集には、35歳までという年齢制限があった。それが何を意味するのかさして気にもとめなかったが、まもなく35歳の誕生日を迎える私には今しかない。そしてその「今」には、私を引き留めるものがなにもなかった。生まれ育った東京を離れ、見知らぬ土地で暮らす。からむしの魅力以上に、実はそのことがもっとも心を動かした。

ところが、「人生の休み時間」のつもりで訪れた昭和村での最初の10か月が、私を思わぬところへと連れていった。

奥会津に暮らして、来年は30年となる。ここはもう、休み時間を過ごす場所ではなくなった。冒頭に掲げたメイ・サートンの詩のように、長いさすらいの中にこそ実りの種があったことを、ゆっくりとふりかえってみたい。